

私の本棚②


 李妍焱 [著] (岩波新書)
 『中国の市民社会
 —動き出す草の根NGO—』

立命館大学 長瀬 修



昨年の私のベストワンである。昨年度は五回、中国を訪問したが、本書が刊行された十一月以降の訪中には必携の書となった。NPO学会優秀賞の受賞作でもある。

中国の市民社会を取り上げている本書に刊行直後に目を向けたきっかけは二つある。一つは、昨年の尖閣諸島をめぐる日中のさらなる関係悪化である。私たちの現在を「戦前」にしないために自分には何ができるのかという恐ろしい問いが浮上しているからである。冷戦の時代にも感じなかった戦争、開戦が現実の可能性となつてしまった。

そう考えたときに、自分の研究、活動分野である障害学、障害者運動において何ができるのか、考えざるを得なかった。そうした思いで、自分なりのとりくみを始めていたところに、本書との出会いがあった。「政治思想教育の影響により、多

くの中国人が真剣に、客観的に日本を学ぶようになることは、現状では期待できない。日中間の国民感情には、日本側が主導して努力していくしかない」「はじめに」六頁という著者の言葉はとりわけ重い。

しかし、①中国社会に「NGO人」登場、②草の根NGOの戦略、③ソーシャル・ビジネスの可能性と隘路、④市民社会の底力という、四章構成で中国の市民社会のダイナミックな動きを描く本書には、希望が満ちている。

改革開放により社会問題が噴出した九〇年代半ば以降、純粹に市民社会の立場で環境保護や、女性や出稼ぎ農民工、障害者の権利擁護にとりくむNGOの姿がここにはある。厳しい環境のなかで苦闘する「仲間たち」の姿がここにはある。日本が一枚岩でないのと同様に、中国も一枚岩でなく、多様性に満ちていること

にあらためて気づかされる。

本書に魅かれたもう一つの理由は、障害者の権利委員会が中国政府に対して発した勧告である。中国政府は、障害者の権利条約を早期に批准しただけでなく、実施状況に関する報告の提出も条約に従って行っている。昨年九月の障害者の権利委員会での報告の審査が行われ、「総括所見」と呼ばれる勧告が出された。その勧告に、官製NGOである中国障害者連合会以外の市民社会の障害者の声に中国政府は耳を傾けなければならぬとある。

そのメッセージは世界の市民社会に対しても発せられている。たとえば、日本の障害者組織の中国のパートナーは、圧倒的に官製NGOばかりだった。日本の市民社会と、障害分野の市民社会組織との連携は一部しか行われてこなかったのが実態である。私が理事を務めている知的障

害者とその家族の国際NGOであるインクルージョンインターナショナル(国際育成会連盟)もその一例である。中国の正規会員組織は前述の連合会である。

本年一月に中国の市民社会で活躍中の難病・障害分野のリーダー三名の方を招聘したのに続き、中国での障害者の権利条約にとりくむ三名のリーダーを招き、一〇月三十一日に立命館大学にて、十一月二日に東京大学にて、「障害者の権利条約と中国—市民社会の取り組み(仮)—というテーマで研究会や公開講座を開催するのは、本書の問いかけへの私なりの回答の一つである。

長春生まれで、九〇年代前半に来日し、現在は駒澤大学文学部に教授として勤務するかたわら、「日中市民社会ネットワーク」(CSネット)の代表として活動する著者の冷静な中国の市民社会の活写と分析である

と同時に、日本の市民社会への熱いメッセージでもある本書は最終頁で次のように述べている。

「根っこから日中の相互理解を深め、国民感情を改善していきたいなら、社会問題、公共の問題に本気で取り組む草の根のキーパーソンの間で、顔が見え、体温が感じられる人間くさい交流と連携関係を地道に作っていかなければならない」

